

<レポート>

原三溪市民研究会
——美術館の市民協働と生涯学習——



横浜美術館・大佛次郎記念館
特任研究員 猿渡紀代子

1. はじめに

毎月第2土曜日の午後、岐阜県や群馬県から来る数人を含め 30 名近い市民たちが、横浜美術館の会議室に集合し、原三溪市民研究会例会が始まる。研究会は 2007 年に発足し、2009 年横浜開港 150 周年を記念して 900 頁もの大著『原三溪翁伝』（財団法人三溪園保勝会・公益財団法人横浜市芸術文化振興財団編、藤本實也著、思文閣出版）を刊行した。それ以来6年間、市民主体の研究会として活発な活動を続けている。この研究会がどのように誕生し、どのような活動を展開してきたのか、発足に関わった一人としてここにご紹介したい¹。

2. 原三溪市民研究会の発足から『原三溪翁伝』の刊行まで

(1) すべての始まり

1989(平成元)年横浜美術館が開館してから間もない頃に、当時の学芸員全員が展覧会企画案を提出する機会があった。筆者が提出した企画案のひとつが「横浜シリーズ」と題する3つの展覧会「幕末・明治の横浜」「原三溪」「横浜の都市デザイン」であった。これらは幕末から現代にい

¹ 本稿は、次の拙稿をもとに加筆修正を行ったものである。猿渡紀代子「刊行の経緯——あとがきにかえて」、藤本實也『原三溪翁伝』 思文閣出版、2009 年、pp.888-895。猿渡紀代子「原三溪市民研究会 5 年のあゆみ」、『原三溪市民研究会 五周年記念誌 2010～2014』原三溪市民研究会(編集・発行)、2014 年、pp.13-16。

たるまでの、横浜と美術とのかかわりを示す特徴的な局面をとりあげることを意図していた。

このうち最初の企画案は、開館10周年記念展として、2000年の「幕末・明治の横浜展—新しい視覚と表現」に結実した。第二の企画案は、2009年の開館20周年と横浜開港150周年に合わせての開催が計画されていたが、諸般の事情により中止に追い込まれた。この企画案「原三溪展」は、実業家にして社会貢献家、庭園デザイナーにして茶人、美術コレクターにしてパトロンという多面的な活動をした三溪・原富太郎(1868～1939)の全体像を示し²、そのすべてを貫き、底流をなす歴史観や美学を探りあてることと、三溪コレクションの紹介にとどまらず三溪の精神に迫ることを企図していた。

三溪は、関東大震災後の横浜復興会会長に就任したときに、次のような演説を行っている。

此は言はば横浜の外形を焼尽したと云ふべきものでありまして、横浜市の本體は儼然として尚存在しているのであります。横浜市の本體とは市民の精神であります、市民の元氣であります、(中略)現在の横浜は全く一枚の白紙となつたのであります、(中略)今日は最新の文化を利用するに於て千載一遇の機会を天より賦与せられたものと言はねばならぬ(『原三溪翁伝』p.281)。

これはまさに、現在横浜市をはじめとする多くの自治体が推進している市民協働の考え方を90年以上前に先取りしていたものといえる。経済恐慌や震災など、横浜の危機に際してそのたびに救済に奔走した三溪を顕彰する展覧会は、横浜開港150周年を記念するにふさわしい事業と思われた。

さらに、『原三溪翁伝』中の第3篇に詳述されているように、三溪の公的活動や表の顔と密接不可分につながり、それを支えていたのが、家庭生活や趣味である。その人生哲学と生活美学は、今日の私たちにとっても大変示唆的であり、真に豊かな人生と生活とはどのようなものであるのかを教えている。三溪は「横浜の歴史が生んだ偉人」としてだけでなく、「他者のために、そして心豊かに生きた人間」として、未来を担う子供たちにも三溪のことを伝え、ひとつの生き方モデルを提

² 財団法人三溪園保勝会編『三溪園100周年—原三溪の描いた風景』神奈川新聞社、2006年。

示するだけの価値がある。

(2) 原三溪市民研究会の構想と発足

こうした考えのもとで、すでに展覧会企画案の段階から、「三溪を学ぶ、三溪に学ぶ」というコンセプトで市民研究会の構想が含まれていた。調査・研究は決して専門家の独壇場ではなく、まして三溪のように多面的な人物像に切り込むためには、さまざまな経験や立場、関心をもつ人々がかかわることが必要であり、そうした方法がより豊かな成果をもたらすと考えた。

この間に、三溪に深い関心を寄せ、市民との共同研究という考え方に共鳴する人たちとの出会いがあった。第一の出会いには、当時東京外国語大学教授で大佛次郎記念館研究員であった内海孝先生である。近代経済史を専門とする内海先生は、1987 年に藤本實也の名著『開港と生糸貿易』の復刻版(名著出版)の監修者をつとめ、藤本家との縁を深めていた。「原三溪翁伝」の膨大な原稿が存在することは3年前からご存知であったので、その刊行を願って、各所に働きかけていたが、実現を見ないままであった。

2006 年夏に初めて内海先生とお会いして、志を同じくすることを確認し合っていたが、翌 2007 年4月に筆者が横浜美術館学芸員の仕事に加えて、大佛次郎記念館館長補佐の兼務辞令を拝したことで、研究会発足への動きを加速することができた。この全くの偶然は、大佛次郎の天からの差し金であろうか。大佛は、今から 50 年以上前に『神奈川新聞』の長期連載記事「ちいさい隅」で二回も(1958 年 12 月 2 日付「死児の齢」、1960 年 3 月 29 日付「風の三溪園」)、三溪園の文化的価値を説いている。こうして内海先生は原三溪市民研究会の代表者を引き受けて下さった。

第二は、食と文化やタゴールをテーマとして、横浜市と神奈川県でさまざまな市民活動を展開している大場多美子さんとの出会いである。大場さんは、日本ベンガル協会の事務局を担っており、2006 年が岡倉天心の英文著書「茶の本」刊行 100 周年にあたっていたことから、横浜開港 150 周年・中区区制 80 周年記念プレイベントとして、講演会「横浜開港と共に生きた人の生き方を学ぶ」を同年 11 月に横浜市開港記念会館で開催した。筆者はリレートーク「私にとっての横浜開港 150 周年とは」に招かれ、「原三溪市民研究会」の構想について話した。大場さんは、自らが代表をつとめる非営利の合同会社ピティビ(PiTiVi: 平和・つながり・勝利を意味する)の名称で、研究

会事務局の庶務経理を担当して下さることになった。

市民参加を広く募るにあたっては、研究会の骨組をつくっておく必要がある。三溪園を管理運営する公益財団法人三溪園保勝会と、横浜美術館の指定管理者である公益財団法人横浜市芸術文化振興財団がこれを主催し、合同会社ピティビの協力、そして朝日新聞横浜総局・神奈川新聞社・横浜青年会議所の後援を得ることになった。研究会事務局の学芸チームには、三溪園から清水緑学芸員、横浜美術館から筆者の他に学芸員 3 名(柏木智雄、八柳サエ、内山淳子)が加わった。

こうした態勢を整えた上で、周知広報をかねた3回のイベント(講演会と三溪園見学)を行い、2007 年9月から原三溪市民研究会をスタートさせることになった。研究会への参加を呼びかける募集チラシのキャッチコピーは、「横浜開港 150 年の中に原三溪を位置づけ、その生き方に学びつつ、真の国際性とは何かを考える」であった。

イベントとしてまず、内海先生による2回の講演会「なぜ横浜は『開港』したのか——横浜開港と外国人」(2007 年 6 月 9 日)および「なぜ外国人は横浜をめざしたのか——生糸貿易と原善三郎」(2007 年 7 月 14 日)を行った。実業家原富太郎が活躍しはじめた明治 30 年代以前の横浜について知ることで、前提となる知識を共有することを目指していた。3 回目は三溪園でスタディ・ツアー(2007 年 8 月 11 日)を行い、同園の生き字引的存在である川幡留司さん(三溪園参事)のガイドによって庭園と古建築を巡った。

最も危惧されたのは、資料コピー代や通信費として会費1万円を負担していただく市民メンバーの募集に対して、どれほどの応募があるかということだった。募集チラシを広く配布し、広報努力を重ねたが、『神奈川新聞』文化欄の記事「原三溪の『人』に光一幻の評伝出版目指す」(2007 年 6 月 22 日付け)に助けられた。幸いにも 25 名の市民メンバーが参集し、稿本の構成、つまり第 1 篇「事業と生涯」、第 2 篇「公共貢献」、第 3 篇「性格と趣味」にしたがって各人の希望を出してもらったの班分けも、人数の点でバランスよく成立した。

応募は横浜市内だけでなく、東京や群馬県からも寄せられた。とりわけ、三溪が 36 年間経営に携わった富岡製糸場の世界遺産化をめざす「富岡製糸場世界遺産伝道師協会」に属する 3 人の

方々の参加を得られたことは、当研究会の活動に幅とふくらみを与えてくれた。市民メンバーには、三溪園でガイドボランティアをしている方々も含まれ、元学芸員や図書館司書、企業経営者、工芸家、活発な文化活動を実践されている方々など、多士済々である。多面的な原三溪にアプローチするためには、多様な人々による協働が豊かな実りをもたらすはずであるという企図は、こうして現実のものとなった。

(3)原三溪市民研究会の活動と展開

原三溪市民研究会の月例会は、横浜美術館の円形フォーラムを会場として、毎月第二土曜日の午後 2 時間を基本として開かれた。2007 年 9 月から 2008 年 11 月まで合計 15 回の研究会を第 1 期として、1800 枚、頁数にして 3600 頁の手書き原稿を 3 班の各々に分け、索引カードを作成しながら読み込むという作業を続け、2008 年 10 月から初校を開始した。

その間に 2 回の研修旅行や特別レクチャーも行った。2008 年 4 月に富岡製糸場と、三溪の義祖父原善三郎が生地(現埼玉県児玉郡神川町)に築いた庭園(天神山)を訪れ、そのすばらしさと三溪園との違いなどを実感した。また同年 7 月には富山大学教授・根岸秀行さんによる特別講演会「日本生糸と売込商—富太郎と三溪」を実施した。

2008 年 9 月例会の折には、久保山墓地に眠る三溪の墓参をして、故人への報告ができただけでなく、五輪塔の梵字が読める人、アールデコ風の浮彫りがある石碑について知っている人、墓地全体の様子を話してくれる人など、墓参に参加した 20 数人の数のメリットを再認識することとなった。

同年 11 月には三溪の生地、岐阜県柳津に赴いた。定宿であった水琴亭で三溪の居室と自筆襖絵を見学し、母方の祖父で南画家であった高橋杏村の顕彰碑の前では碑文を確認することができた。二回とも近畿日本ツーリスト横浜支店の協力によって、「原三溪ゆかりの地を訪ねる」日帰りバスツアーの形をとり、研究会メンバーの他に一般からの参加もあった。現地では、岐阜女子大学教授・丸山幸太郎さんのレクチャー「岐阜が生んだ原三溪」を聴講し、地元で以前から原三溪の顕彰事業を続けている岐阜聖徳学園大学からの参加もいただいた。

稿本の解読作業を終えた後、例会では会員全員がそれぞれ担当箇所の内容を発表する輪読会を続けた。2008 年 12 月から 2009 年 11 月までは原三溪市民研究会の第 2 期と呼ぶことができる。2009 年 3 月には横浜美術館協力会主催の、横浜開港 150 周年・協力会設立 25 周年記念講演会「原三溪を考える」が行われた。200 名を超える聴衆を前に、内海先生による基調報告「原三溪前史：開港と原善三郎」を皮切りに、市民研究会各班の代表 3 名がパワーポイントによる画像をまじえながら「富太郎の登場と事業」「三溪の公共貢献」「三溪の芸術と趣味」について発表した。この講演会の様子は、「TV フォーラムかながわ」というケーブルテレビ番組を通して、5 月 11 日から 1 週間のあいだ神奈川県全域で紹介された。

2009 年 7 月には、横浜市開港記念会館で開催されたイベント「横浜・原三溪・インド～つながりを語る一枚の写真」(横浜開港 150 周年記念・還シルクロード実行委員会主催)に市民研究会として参加し、5 名の会員がリレートーク「原三溪とインドとのつながりをひもとく」を行った。原三溪、野村洋三、タゴール、荒井寛方、アプルンバ・クマルチャンダ(タゴールの秘書)が移築された臨春閣玄関前に立つ一枚の写真(1929 年 3 月撮影)は、ここで初めて公にされたものである。

話が前後するが、『原三溪翁伝』の刊行にあたって一番の難問は、必要な出版費用をどう捻出するかであった。調査研究助成や市民活動助成をいくつか申請したが空振りに終わった。そもそも出版に対する助成は大学、しかも理工系の分野が中心で、きわめて限られている。しかし、2008 年に入るとマスコミで原三溪が紹介される機会がふえていった。

まず、ウェブ上の『ヨコハマ経済新聞』がエリア特集を組み、「開港 150 周年を機に“三溪園の生みの親”から学ぶ横浜のユニークな歴史と浜っ子のアイデンティティ」と題する記事をアップした(2007 年 12 月 1 日～2008 年 2 月 24 日)。ついで、朝日新聞が「1859～開港 150 年へ」と題するシリーズ記事の中で、「原三溪評伝 悲願の出版へ——60 年眠っていた生原稿、研究者ら動く」という見出しをつけて、原三溪市民研究会の活動を紹介した(2008 年 4 月 3 日付)。さらに、テレビ東京の番組「美の巨人たち」が原三溪と三溪園をとりあげた(2008 年 8 月 9 日放映)。

『朝日新聞』の記事の反響は大きく、複数の個人や企業が研究会の出版プロジェクトに関心を示し、物心にわたるサポートの申し出をいただいた。そのたびごとに研究会事務局から説明や協議に出向いたが、三溪園の歴史的・文化的価値や原三溪の重要性を認識、評価する人たちに出

会ったことは、プロジェクト推進の大きな力となった。

そして、三溪が設立に大きくかかわり、自ら初代頭取を務めた横浜銀行(設立時の行名は横浜興信銀行)が出捐のはまぎん産業文化振興財団より、「産業・経済、文化の両面にわたって横浜の発展に大きな功績を残した三溪の歴史を後世に残すことは重要な意義があり、財団の公益事業目的にも合致する」ことから、横浜開港 150 周年記念事業の一つとして出版実現への経済的助成の申し出を受け、『原三溪翁伝』が刊行されることとなった。

(4)『原三溪翁伝』出版とその後の市民研究会に託した思い

以上のように、個人と組織の各々が、それぞれの能力や時間、人材や予算など持てるものを持ち寄ったことによって、『原三溪翁伝』は誕生した。1945 年 8 月 16 日、終戦翌日にして三溪没後 6 年目の祥月命日に藤本實也が書き終えた原稿は、64 年間の長い眠りの末に、「横浜市の本体である市民の力」(関東大震災時の三溪の演説より)によって、日の目を見たことになる。

冒頭でふれたように、同書刊行の発端はそれより 20 年前にさかのぼるが、その頃から現在までの動きは、三溪から数えて三代目にあたる原家の当主、ホテルニューグランド会長の原範行氏の理解と支持がなければ不可能であった。また、故郷を同じくする三溪の盟友で、1943 年当時「原三溪翁傳記編纂委員会」の委員をつとめた野村洋三の孫にあたる野村弘光氏から、長きにわたって温かいご支援をいただいたことも忘れることができない。

同書刊行後の原三溪市民研究会の行く末について軽々に語ることはできないが、これをステップボードとして展開していくべき活動は幅広くある。同書が刊行されたことで、はっきりした輪郭をもって三溪の全体像が浮かびあがってくるであろう。実業家としての活動、社会貢献の諸側面、美術コレクターにしてパトロンであった実体、生き方や心情にかかわる真実など、歴史上の人物でありながら、原三溪の存在は現代の私たちに一つの道標を示している。

すでにその萌芽が見られるように、原三溪市民研究会の活動は、普及的なブックレットの出版や、継続的な勉強会、三溪や生糸というキーテーマを介して地域間の市民交流へとつながる可能性をもっている。原三溪の精神と美学が凝縮した三溪園は、開園から 100 年以上を数える歴

史・文化・環境遺産である。開港によって一気に国際港都となった横浜に、日本文化の本質にふれ、四季折々の自然と景観を楽しめる場所、三溪園があることの意味は大きい。その恵みに感謝し、原三溪の精神を活かした多様な試みが継続されることを願ってやまない。

3. 市民主体の研究会として、6年間の歩み

2009年11月13日、『原三溪翁伝』の出版を記念する「感謝の集い」が、横浜のホテルニューグランドで開かれ、研究会の会員たちと出版に際してお世話になった方々が参集した。出版助成をして下さったはまぎん産業文化振興財団のご厚意によるものである。横浜市長に就任したばかりの林文子氏も臨席され、温かい祝辞をいただいた。

『原三溪翁伝』は、同財団によって、神奈川県下を中心とする公共図書館や大学、関係機関に寄贈された。また翌2010年1月27日の神奈川新聞は、横浜開港150周年を記念して刊行された同書を横浜の財産として後世へつなげようとする社説を掲げた。

「感謝の集い」の後、原三溪市民研究会は文字通り市民主体の研究会として新たなスタートを切った。それから現在まで6年間にわたり、会員の例会発表と研究会内外の講師による講話を重ね、漢詩分科会も誕生して研究を深めている。また毎年1回のスタディツアーを継続し、会員にとって大きな財産となっている。紙幅の関係で、こうした活動の詳細については『原三溪市民研究会 五周年記念誌 2010～2014』を参照いただきたい。以下では、対外的・普及的な側面に絞って活動内容をご紹介します。

(1) ホームページの開設、会報の発行

市民研究会の最初の総会が開かれた直後、2010年2月からホームページ立ち上げのための具体的検討が始まり、「原三溪市民研究会～三溪を学ぶ、三溪に学ぶ～」と題するHPができあがった。これには当時の最若手、コンピューターに強い久保会員と藤嶋副会長の力が大きく与っている。「市民研究会について」「市民研究会の活動」「原三溪はどんな人?」「『原三溪翁伝』とは」といった内容だが、同年5月に4月例会などの活動報告がアップされ、3名の新会員を迎えたことがわかる。このHPのリンク先には、三溪園・横浜美術館・富岡製糸場の名が並び、最後に速水会

員のブログ「堅曹さんを追いかけて」が紹介されている。生き生きした文章で旬の話題が提供されるので固定ファンも数多く、このブログを通じて山形県在住の方が入会してきた。ちなみに、速水堅曹は明治期官営時代の富岡製糸所長をつとめた製糸技術指導者である。

さらに、同年 4 月から会報発行に向けての動きがスタートした。藤嶋副会長が提唱し、第 1 号(2010 年 12 月 14 日)から最新の第 10 号(2016 年 3 月 12 日)にいたるまで、編集担当を一手に引き受けている。形式的には、A3 版二つ折りに単色刷りという簡易なものであるが、多様な会員たちからの投稿記事は幅広く、変化に富んでいる。新しいトピックや各人が深めた知見を全員が共有するだけでなく、3 千部を印刷して公共施設などに配布し、原三溪について多くの方々に知っていただく絶好の媒体となっている。

(2) 他団体との連携・交流

2011 年、横浜シティガイド協会の協力を得て「横浜ウォーキング—原三溪ゆかりの地を訪ねて」(11 月 15 日)を実施し、原善三郎の屋敷があった野毛山公園や旧生糸検査所の建物など三溪ゆかりの場所を訪ね歩いた。続けて、横浜美術館の Web ラジオ番組「ラジオ美術館」に会員が出演(11 月 18 日)し、原三溪と市民研究会の紹介を行った。

2012 年、横浜みなと博物館でのシンポジウム「横浜港の生糸貿易と生糸産地」(3 月 20 日)に内海顧問と速水会員がパネリストとして参加し、さらに同館主催ウォーキング「ミナト散歩 生糸編—原三溪と生糸貿易ゆかりの地を歩く」(3 月 24 日)では当会員たちがガイド役をつとめた。

2013 年、横浜美術館・横浜美術館協力会との共催で、同名の著書を有隣堂から出版された³西和夫先生(神奈川大学名誉教授)の講演会「三溪園の建築と原三溪」(4 月 20 日)を開催した。さらに夏には、三溪の生地岐阜に設立された「原三溪・柳津文化の里構想実行委員会」の会員たちを迎えて交流会を実施し、三溪園ガイドツアーを会員たちが引き受けた(7 月 28 日～29 日)。

³ 西和夫『三溪園の建築と原三溪』有隣新書 No. 72、有隣堂出版、2012 年。

2014年は、当研究会の5周年記念、また富岡製糸場が世界文化遺産に登録されたことを記念して、横浜美術館・三溪園との共催で、シンポジウム「富岡製糸場と横浜の原三溪—36年間の経営と継承—」(10月11日)を開催した。

2015年には2回目となるシンポジウム「原三溪と矢代幸雄—二人は美術を通して何を実現しようとしたのか」(11月14日)を開催し、150余名が聴講した。東京文化財研究所の山梨絵美子氏の基調講演に続けて、三溪園学芸員の清水緑氏、久保いくこ会員と藤嶋俊會事務局長が加わってのフォーラムとなった。

(3) 教育普及活動:三溪園でのクイズ・イベント

原三溪のことを広く知ってもらい、地域の子どもたちにも伝えていくために、2012年6月から出前授業「三溪を学ぶ、三溪に学ぶ」の検討会をスタートさせた。3班に分かれて「何を伝えたいか」のアイデア出し、その絞り込みを行い、班ごとの発表や意見交換を経て、具体的な教材づくりへと討議を続けた。また、学校現場ではどのような必要があるかを調査するために地域の学校へ出向いたり、三溪園の教育普及担当者との話し合いを重ねた。

最終的に、三溪園の催しと連動する形で、2014年4月28日～5月4日「クイズで学ぶ三溪園、原富太郎と横浜」を実施した。クイズ・パンフレット、缶バッジ、解説シートを用意し、期間中は毎日5～6名ずつの会員が現場に立って、呼びかけや解説などを分担した。ゴールデンウィーク中の三溪園入場者10,550人のうち2,960人がクイズ・イベントに参加して缶バッジを受け取った。グリーン地に旧燈明寺三重塔をデザインした缶バッジは大変好評であった。このクイズ・イベントは2015年も継続し、ゴールデンウィーク中の3日間実施して1500名の参加を得た。

(4) 支援と助成

『原三溪翁伝』の出版(2009年11月)を支援していただいたはまぎん産業文化振興財団にはその後もお世話になった。同財団が発行する冊子『マイウェイ 第77号 原三溪に学ぶ公共貢献

物語』(2011 年 1 月発行)への協力である⁴。『翁伝』を構成する 3 篇(事業と生涯、公共貢献、性格と趣味)から第 2 篇「公共貢献」を取り上げ、各章を平明、簡潔に紹介する記事を、運営委員を中心とする会員が分担執筆した。『翁伝』稿本には図版が入っていなかったもので、それを埋めるべく、各章担当者が案を示し、編集サイドの努力もあって、多くの図版が挿入された。三溪の年譜を掲載したことで、ハンドブックとしても活用できるものとなった。

また、当研究会は 2010 年度から今にいたるまで、「横浜市中区における快適で文化的な都市環境の創造に寄与すること」を目的として設立された「公益信託横浜中区まちづくり本牧基金」から毎年、息の長い助成を受けている。

このように 2010 年から 6 年間にわたる活動を総括してみると、会員たちの好奇心と意欲、探究心と静かな情熱、知見の蓄積と共有に支えられ、外に対しては開かれた姿勢で連携と交流を志して、原三溪市民研究会は着実な歩みを進めてきた。会員数は当初の 30 名から現在は 42 名である。横浜美術館における市民協働事業として出発した当研究会は、その連携の輪をさらに広げながら、市民による自立的な生涯学習の拠点となっている。

4. おわりに

博物館教育の観点から、原三溪市民研究会の活動に関心を寄せたのが、平塚市美術館と同市教育委員会で教育普及担当の学芸員として実績を積んでいた端山聡子氏である。博物館と市民が共同の取り組みをして、埋もれていた地域の歴史や文化を掘り起こし、新たな視点から地域を見直す動きをつくり出すものとして、原三溪市民研究会を取り上げたのである。放送大学ラジオ講座の教科書として出版された『博物館教育論』の中で第 10 章「地域と博物館」を分担執筆した端山氏は⁵、平塚市美術館と金沢 21 世紀美術館で実現された展覧会と並んで当研究会の事例を 2 ページにわたって紹介している。彼女から取材されて筆者が語った言葉「予算がなくても事業

⁴ 『マイウェイ 77 号 原三溪に学ぶ公共貢献物語』財団法人はまぎん産業文化振興財団、2011 年。

⁵ 寺島洋子・大高幸 『博物館教育論』財団法人放送大学教育振興会、2012 年。

はでき、館外の専門家の助力を仰ぎ、必要なお金を得るために市民・民間に働きかけることは理解者と賛同者をふやす過程となった」は、実感として今も生きている。

指定管理者制度の導入が進み、博物館の設立母体である地方公共団体の財政にも限界があることが見えている現在、市民と博物館の協働は、将来的な可能性を示唆している。

参考文献（発行年順）

- 財団法人三溪園保勝会編『三溪園 100 周年—原三溪の描いた風景』神奈川新聞社、2006 年。
- 財団法人三溪園保勝会・公益財団法人横浜市芸術文化振興財団編、藤本實也著『原三溪翁伝』思文閣出版、2009 年。
- 『マイウェイ77号 原三溪に学ぶ公共貢献物語』財団法人はまぎん産業文化振興財団、2011 年。
- 西和夫『三溪園の建築と原三溪』有隣新書 No. 72、有隣堂出版、2012 年。
- 寺島洋子・大高幸『博物館教育論』財団法人放送大学教育振興会、2012 年。
- 『原三溪市民研究会 五周年記念誌 2010～2014』原三溪市民研究会、2014 年。

猿渡 紀代子(さわたり・きよこ)

横浜美術館・大佛次郎記念館 特任研究員、公益財団法人三溪園保勝会 副理事長。神奈川県川崎市生まれ。横浜市立大学卒業。1982年から横浜美術館開設準備室に学芸員として勤務。1989年の開館後は、「恩地孝四郎—色と形の詩人」展(1994)、「アジアへの眼—外国人の浮世絵師たち」展(1996年、第9回倫雅美術奨励賞)、「幕末・明治の横浜展—新しい視覚と表現」(2000)、「ポール・ジャクレ—虹色の夢をつむいだフランス人浮世絵師」展(2003)、「銅版画家長谷川潔—作品のひみつ」展(2006)などを企画。2007年に原三溪市民研究会を組織し、現在は顧問をつとめる。著書に『長谷川潔の世界』全3巻(有隣堂、1997～1998)、共著に *Challenging Past and Present, The Metamorphosis of 19th Century Japanese Art*(ハワイ大学出版、2005)など、監訳にオリヴァー・スタットラー著『よみがえった芸術—日本の現代版画』(2009)がある。2015年、フランス芸術文化勲章シュバリエ受章。